

# 渡辺海旭の社会運動と現代

菊池 結

## I はじめに

現在、宗教者による社会貢献に関する研究が盛んである<sup>1)</sup>。仏教関係の研究では、ランジャンナ氏によって、アジアの上座部仏教圏から興った Engaged Buddhism の訳語として社会参加型仏教の用語が提唱され研究が行われている<sup>2)</sup>。同時に、日本においては、昭和 41 年に、日本仏教社会福祉学会が設立され、仏教福祉や仏教社会福祉といった用語が存在する。

仏教者の社会活動が、近代国家形成過程の明治・大正期に頻発したことは、どのような意味をもつのであろうか。

仏教は、明治維新期の廃仏毀釈が、出世間性や厭世思想に対する批判からも行われたように、社会活動に対して無関心な態度をとる傾向があった。しかしそのような仏教において、明治末から大正にかけて、社会事業を行う仏教者が誕生した。その代表的人物が浄土宗の僧侶であった渡辺海旭（1872 - 1933）である。

幕末から明治維新以来の廃仏毀釈の嵐のあと、仏教者にとって、教団存立の壊滅的危機を克服しいかに復興していくかが最重要課題となった。

また社会が近代化に向けて劇的に変動し、幕末から、そして開国によりさらに積極的に新しい西洋知識が移入されるなかで、新たな西洋近代の社会思想に対応する仏教理念を模索する必要に迫られた。そのことを端的に象徴するのが、渡辺海旭を始めとする社会活動を行う仏教者である。

渡辺海旭は、1872 年（明治 5）に東京市浅草で誕生し、家庭の事情により 12 歳で得度を受けている。浄土宗学本校を卒業後は、当時最先端の研究であったチベット仏教研究やサンスクリット語等の原典研究に従事し、また革新的な新仏教徒同志会の会員であった。

研究者としての道を歩みだしていた海旭が、留学前に所属していた新仏教徒同志会は、明治期における革新的な新仏教運動の一つとして知られ、仏教の健全なる信仰を根本主義とすることを、綱領の第一に掲げ、従来の仏教を形式的、迷信的、厭世的、空想的な旧仏教として批判した。彼らは、現世主義・自由討論・歴史的研究による仏教の把握に努め、仏教再生と信仰の復活を目指した。

海旭は、1900 年（明治 33）29 歳の時に、浄土宗第 1 期海外留学生として、当時ドイツ領であったストラスブルク大学に留学し、10 年後の 1910 年に帰国するとすぐに、浄土宗労働共済会の設立へむけて動き出している。また、芝中学校校長を初めとする教育事業にも従事し、門下生であるマハヤナ学園の長谷川良信、慈光学園の岩野真男等に対する影響は大きい。1916 年（大正 5）頃より、頭山満、徳富蘇峰ら国家主義者との付き合いも見られ、晩年は国土型の人物として知られている。

海旭に関する先行研究は、芹川博通氏、吉田久一氏によって行われている。それらの研究は、詳細な資料的価値を持つとともに、「大乘仏教の精神」や「衆生恩」などの思想に焦点をあてたもので、海旭の仏教思想と社会事業思想を結びつけた点を評価する海旭研究が主流であったと思われる。

しかし、海旭に関する資料は、関東大震災や戦禍の激しかった深川に自坊があったために、日記や研究業績等は焼失してしまっている。そのために、これまで海旭に直接的な影響を与えたと考えられているドイツ留学期間（1900 - 1910）の内容についてはあまり知られていなかった。

しかし、浄土宗の機関紙である『浄土教報』にあたっていくうちに、海旭が留学中に体験したことや感じたことなどについての雑記を多数投稿していることが分かった。

本論では、以上の『浄土教報』に掲載された留学中の雑記を中心に、これまであまり述べられてこなかった社会事業実践への契機となった出来事について記述したい。また海旭の社会事業思想の特徴を考察することによって、浄土宗の僧侶であった海旭が、何故明治・大正期に社会事業に従事したのか、さらにそこに存在する近代と仏教の問題、そして仏教と社会事業との関係性について考えてみたいと思う。

## II 渡辺海旭と社会事業

浄土宗労働共済会は、留学帰国後の翌年 1911 年（明治 44）3 月に、東京・深川において、労働者のための安価な宿泊施設提供事業を中心に、浄土宗祖 700 年遠忌記念事業として創設された。このような施設は、この時期に各伝統仏教教団によって設立されたが、そこにも社会活動を主眼にする近代仏教の特徴の一面をみることができる。海旭は、このような活動に大きな役割を果たしたのである。以下、海旭に見られる社会事業思想の特徴を述べる。

### i 国家的・科学的社會事業

海旭の社会事業思想に見られる最大の特徴は、国家的・公共的施策の未整備・未確立期にあって、仏教の精神を基本としながらも、きわめて国家的に社会事業を把握したことである。ここではすでに、近代以前にみられたような戒律や信仰の発露として実践された社会活動との意識の違いがみられる。

つまり、近代国家の形成という社会的要請に応えるという基本姿勢が海旭の社会活動の基本理念となっていると考えられる。後に述べるが労働問題に関しても困窮にあえぐ各労働者の救済というよりも、近代国家の不十分な条件を補完するという国家優先の傾向がみられる。

海旭が起草したとされる労働共済会の設立趣意書には、「国家設備の至らざる所を万一に補翼せんとするの至情」からこの会を設立したとある。更に、『社会問題の趨勢及其中心点』<sup>3)</sup>では、「救済問題は国民全体の義務」であり、「個人的であったのが、国家的となった」との見解を示している。

海旭による労働者保護の活動は、貧しいものへの憐れみや信仰の発露といった従来考えられてきた救済とは、異なった仏教者による社会活動の形が見えてくるのである。

同時に、海旭が社会事業の先駆者であると評価される一方で、このような海旭の国家優先的な社会事業思想は、国家への批判的視点をもちえずそのまま全体主義にむかう危険性をともなっていた。これは海旭のみならず、近代仏教者が社会活動を行う場合に潜む傾向として無視しえないのである。

西洋の社会主義運動に影響された労働運動は明治期から大正期に日本でも次第に組織化された。その運動は必然的に労働者階級を搾取から解放する階級闘争をとまなう。そのような階級闘争問題における海旭の見解にも、国家的視点を重視するゆえの限界があった。労働組合の結成やストライキの多発した 1919 年に発表された『社会問題の解決』<sup>4)</sup>において、海旭は労働問題における労働者と資本家の関係に対して、必ずしも物質的な経済解決や、官僚による政治的な解決に求めなくても、他人の地位の容認による精神的

な「宗教的解決」によって階級闘争問題を解決することができることを主張している。

しかし労働者は、資本家に対して圧倒的に弱い立場にあり、且つ貧困にあることには触れず、労働者階級と資本家階級の利害が本質的に報恩精神によって一致することを説いている。海旭の主張は、ややもすると、労働者の階級的自覚をおさえ、資本主義的搾取制度を維持する思想とも繋がりがかねないのである。

そして第2点は、「現代感化救済事業の五大方針」を提唱し、社会事業を理性的・科学的なものと把握しながら、一方で仏教を社会事業における「精神」として捉えたことである。海旭は、慈悲の実践や菩薩道と社会事業とは、その精神においては一致しても、実践の方針や方法論は異なるものであることを理解していた。

すなわち、従来のただ可哀想だからといった感情中心主義の慈善から脱却し、彼が科学的といった言葉で表すところの、「確固たる基礎の上に立ち、一定の方針」があり、時代の進歩と発展に合わせた現代的で科学的な社会事業を目指したのである。

1916年に発表された『現代感化救済事業の五大方針』<sup>5)</sup>では、①感情主義から理性中心主義へ②発作的一時的断片的慈善から科学的系統的感化救済事業へ③施与的中心主義から共済中心主義へ④救済における奴隷主義乞食主義非人主義から人権を基礎とした救済主義へ⑤救済的慈善から防貧的慈善へ、の五つの方針を提唱している。

その一方で、古来より変らないものとして大乘仏教の精神を社会事業の基礎として据えたのである。海旭は、社会事業におけるこの精神に、「大乘仏教思想の雄大な復活を見るのであります」と述べている。また、『大乘仏教の精神』<sup>6)</sup>においては、ハンマーの音やシャベルの響き、油じみた労働服のなかなど、あらゆるところに大乘仏教は存在すると述べ、大乘仏教の精神と労働者保護事業との関係性について説明している。

## ii 海旭の宗教観 - 社会宗教 -

しかし同時に海旭は、あくまでもその生涯を浄土宗の僧侶として独身主義を貫き、禁酒禁煙を訴えて近代に適応した新戒律主義を提唱した。明治期は、大内青巒（1845 - 1918）を始めとする在家仏教者の活躍が目覚しく、新仏教徒同志会の会員も多くは、教団に属さない在家仏教者であった。

僧侶でありながら社会事業を行うことは、海旭にとってどのような意味を持っていたのであろうか。海旭は、健全なる宗教とは、あたかも3角形の3辺のように、個人と社会と国家の3方面を具備する必要があるとして、個人としての自己が心霊の救済のほか、国家との同化性や適応性が、偉大な宗教にとって最も大切な要素であるとしている。

それだけではなく、そもそも宗教は発達し、「社会宗教」にならなくてはならないと述べている。社会宗教とは、いかに生きるべきか、いかに働くべきか、いかに現在において幸福になるべきかを明白に指導する責任を持つことである。すなわち、海旭が国家的・近代的と考える社会事業の中心に、大乘仏教の精神を据えることによって、彼が主張するように仏教と国家と社会との強固な結びつきが完成したと考えられる。

## Ⅲ ドイツ留学と西洋との出会い

海旭の思想形成を理解するうえで決定的な契機をなしたと考えられるのが、10年間におよぶドイツ留学

である。すでに述べたように海旭は、1900年に浄土宗第1期海外留学生として、サンスクリット語を初めとする語学等を学ぶために、ストラスブルク大学のロイマン教授のもとに留学している。

海旭のドイツ留学は、二つの時期に大別することができる。前半期には西欧の宗教視察を行い、『浄土教報』には、フランスやドイツなどの近代化が進み、世俗的合理的にみえる西欧諸国のなかで、何故キリスト教の信仰がいまだ衰えることなく強い影響力を人々に対してもっているのかという素朴な驚きを書き送っている。

海旭は、そのキリスト教の社会的求心力を、質素で禁欲的な生活と、なによりも彼等が積極的に行っている「社会事業」に答えを見出している。

そして後半期には、社会主義者を中心とした「自由思想団」へと入団し、彼等との交流が見られる。イギリスやフランスに遅れてようやく産業革命をむかえた当時のドイツは、都市労働者の増加にともない、ドイツ社会民主党が最も勢力を拡大した時期であった。この頃には、海旭のカトリックに対する心証は反転し、カトリックと政治とのつながりを嫌悪するようになっていく。その転換点となったのが、1904年に勃発した日露戦争であったと考えられる。

以下、「カトリックの慈善事業」、「ドイツ社会民主党と自由思想団」、「日露戦争開戦」という題名のもとに、順次述べていくこととしたい。

#### i カトリックの慈善事業

留学の前半期に、海旭が目撃したのが、彼が述べるところのキリスト教徒の「实际的」な慈善事業であった。渡欧翌年の1901年に、『浄土教報』に掲載された『半秋回想録』<sup>7)</sup>において、初めて社会事業の文字が見えるが、その記事は以下の言葉で締めくくられている。

嗚呼宗教が民心を継ぎ徳教を維持する所以のものは、決して性相の空論にあらず、口舌の布教にあらず、金碧荘嚴の殿堂にあらず、攻略的權變的法律的の俗界の手腕には固よりあらず、唯一、信仰より発せる实际的行動のみ、慈善的社会的事業のみ。

当時ドイツは、産業革命の負の部分が社会問題化していた。労働環境は悪化し、貧富の格差が拡大しつつあった。1901年の『日想観楼感』<sup>8)</sup>では、近い将来日本もドイツと同様に、貧富の差が生じるだろうと述べ、ぜひとも浄土宗でも社会事業や慈善事業に目をつけていただかなければならないと記している。ここでも社会事業こそが、「是が宗教の社会に尊敬を受け、価値を維持する根本なのだ」と結論づけているのである。

また信仰に基づいた宗教の力のみによってこそ、このような事業が成し遂げられるのだといった発言は、この時期に頻繁に見られる。

#### ii ドイツ社会民主党と自由思想団

しかし日露戦争前の1903年頃より、『浄土教報』や友人に向けた手紙には、ドイツ社会民主党やロシア革命党との交流についての記述が見え始める。この頃の海旭は、社会主義者を中心とした「自由思想団」に入団していたようである。

では、海旭の入団していた自由思想団とは一体どのような団体だったのだろうか。海旭は、自由思想団の団員は、社会民主党員や、唯物主義者、原始キリスト教徒や、旧教改革党、更には亡命中のロシア革命党員であると紹介し、その多くが社会主義者であった。すでに述べたように、留学当時のドイツではドイツ

社会民主党が勢力を拡大している時期である。

1906年6月11日発行の『浄土教報』では、自由思想団の紹介文が掲載され、海旭はこの自由思想団は、新仏教徒同志会によく似ており、キリスト教の不合理なる信条と、教会が圧政的に教権を振り回すのに反抗して起ったものであり、その信条は、宗教の自由討論と寛容主義にあると述べている。その寛容主義のため、様々な人間がいるが、カトリックに対する態度は、「頗猛烈」であつたらしい。

この団体は、フランスにもあり、パリで1905年に万国大会を開いていたらしいが、更なる詳細は今後の研究を待たなければならない。

しかしこの自由思想団はカトリックと敵対し、なかでも海旭の記述からは、カトリックと政治との関係性を問題としていたことが読みとれる。当時、カトリック教徒を母胎とする中央党は、ドイツ社会民主党の最大対立政党であった。海旭が、このように社会主義者との交流を始めたのは、日露戦争（1904－1905）の影響が考えられる。

### iii 日露戦争開戦

当時、黄禍論を積極的に宣伝していた皇帝ヴィルヘルム2世は、世界政策を標榜し、軍備を充実した。黄色人種と白色人種との戦いという側面をもつ日露戦争を、ロシア皇帝と従兄弟の関係にあったヴィルヘルム二世は、ロシアの関心を極東にむける思惑もあり、ロシアを支持していた。また1897年に帝国外務長官、1900に宰相に就任したビューローも、「我々もまた陽の当たる場所を要求する」と宣言し、植民地獲得を全面的に肯定している。

そのような政治状況のなかで、ドイツ社会民主党は、政府の軍国主義化を批判し、軍備縮小を訴えていた。また第二インターナショナルでは、開戦直前に、もし戦争が起きた場合には、戦争の拡大を阻止し、平和の維持に努めるとの声明を出している。

このような社会主義者たちの日本に対する同情と肯定的な雰囲気をつきかけとして、海旭は彼等との交流を始めたと考えられる。

海旭の社会事業に関する発言は、日露戦争開戦以後見られないが、突如として帰国直前の1909年7月に、雑誌『宗教界』<sup>9)</sup>に「教家の経営すべき夏期慈善事業の一」を掲載し、児童のためのサマーキャンプのようなものを紹介、奨励している。そして帰国した翌年3月には、すでに浄土宗労働共済会が設立されているのである。

従来指摘されているように、海旭がこのような社会事業を行った契機が、ドイツ社会民主党の社会改良政策の影響を受けたであろうことは、手持ちの資料からは見出せなかった。しかし、近代国家にとって労働問題の解決が急務であることを意識させたのは、ドイツ留学において社会主義者との交流にあったことは想像できるのではないだろうか。

## IV おわりに

海旭の社会事業は、すでに述べたように国家的な視点が濃厚であり、晩年海旭は、国士型の人物として知られるようになる。また、その社会事業理解は、現代感化救済事業の五大方針を提唱し、より近代的な社会事業を提唱した点で、先駆的意味を持っている。

浄土宗の僧侶であり、同時に知識エリートであった海旭は、近代国家にとって労働者の自律と保護の重

要性を理解し、宗教者として、且つ近代国家を支える知識人として、社会事業を実践したのである。

このような教団仏教者と知識人としての二つの立場の混在は、海旭の「社会宗教」という考え方に顕著に現れている。彼は、健全な宗教は、個人と国家と社会の3方面を具備する必要があること。つまり、宗教とは、国家の発展に適応して、その国民性を堅固強固ならしめ、これを指導し啓発する実力を具備するものでなければならないこと。そして、現在では、そのように進歩した社会宗教なるものが必要とされる時代となっていると訴えている。海旭にとって、近代的な宗教とは、国家や社会との適応性を持つことであつた。

社会事業の担い手は、その精神において宗教者が相応しいと考えていた海旭は、社会事業という近代に誕生した運動を手がかりに、仏教を社会宗教という新しい段階へと発展させることによって、国家的役割を持たせ、近代的な、すなわち国家や社会に適応することができる仏教の再生を目指したのではないだろうか。

海旭は、1933年（昭和8）に61歳で、その生涯を終えている。労働共済会の活動は、昭和に入ると戦時体制の突入にともなって次第に活動規模を縮小し、戦後は幼稚園が再開されたのをのぞいて活動を終えている。戦後のこの時期にはすでに社会福祉は、高度の専門性が必要であると考え始められており、民間の宗教者は社会福祉の分野からは歓迎されなくなってきているともいえるのである。

しかし、現在の福祉が切り捨てられる時代に、民間のマンパワーとしての宗教家の活動が、ますます必要とされてきているのも事実である。

## 註

- 1) 「宗教の社会貢献活動研究」プロジェクト HP 参照
- 2) ランジャンナ・ムコパディヤーヤ『日本の社会参加仏教—法隆寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理』, 東信堂, 2005
- 3) 『労働共済』, 4巻 11号, 1918
- 4) 『宗教界』, 15巻 4号, 1916
- 5) 壺月全集下巻 p17 - 22
- 6) 壺月全集下巻 p79 - 95
- 7) 『浄土教報』 424号, 1901
- 8) 壺月全集下巻 p411 - 415
- 9) 『宗教界』 5巻 7号, 1909

## 参考文献

- 池田英俊『明治の新仏教運動』, 吉川弘文館, 1976
- 池田英俊・芹川博通・長谷川匡俊編『日本仏教福祉概論—近代仏教を中心に—』, 雄山閣出版, 1999
- 磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』, 岩波書店, 2003
- 大石嘉一郎『日本資本主義百年の歩み』, 東京大学出版会, 2005
- 柏原祐泉『日本仏教：近代』, 吉川弘文館, 1990
- 川西政明『武田泰淳伝』, 講談社, 2005
- 岸本英夫編『明治文化史 第六巻 宗教編』, 洋々社, 1954

- 黒羽茂『世界史上よりみたる日露戦争』,至文堂,1960
- 小風秀雅編『アジアの帝国主義』,吉川弘文館,2004
- 小林大蔵編著『壺月和尚の面影』,壺月先生を語る集い,1933
- 佐々木毅『宗教と権力の政治』,講談社,2003
- ジェームズ・E・ケテラー『邪教/殉教の明治—廃仏毀釈と近代仏教』,ペリかん社,2006
- 芹川博通『シリーズ福祉に生きる 17 渡辺海旭』,大空社,1998
- 芹川博通『渡辺海旭研究—その思想と行動』,大東出版社,1878
- 高石史人「渡辺海旭における国家と仏教」,p123—156,二葉憲香編,『国家と仏教 近世・近代編 日本仏教史研究 2』,永田文昌堂,1980
- 土井直子『『労働共済』誌にみる中西雄洞—労働問題に対する認識及び解決策に関する考察』,p1—26,『長谷川仏教文化研究所年報』,No.23,1998
- 富永健一『近代化の理論 近代化における西洋と東洋』,講談社,1996
- 仲井斌『西ドイツの社会民主主義』,岩波書店,1979
- 長谷川良信「渡辺海旭伝」,p55—67,『あそか』,No.10,1960
- 平間洋一『日露戦争が変えた世界史』,芙蓉書房出版,2004
- 福嶋寛隆編『新仏教』論説集,永田文昌堂,1978
- 室田保夫編『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』,ミネルヴァ書房,2006
- 日本仏教社会福祉学会編『仏教社会福祉辞典』,法蔵館,2006
- 二村一夫「労働者階級の状態と労働運動」,p94—140,『岩波講座 日本歴史 18 近代 5』,岩波書店,1975
- 百周年記念誌編集委員会編『芝学園百年史』,学校法人芝学園,2006
- 法政大学大原社会問題研究所編『新版社会労働運動大年表』,労働旬報社,1995
- 三好一成「浄土宗労働共済会の設立と事業の展開」,『長谷川仏教文化研究所年報』,第24号,2000
- 山本佐門『ドイツ社会民主党日常活動史』,北海道大学図書刊行会,1995
- 吉田久一『近現代仏教の歴史』,筑摩書房,1998
- 吉田久一・長谷川匡俊著『日本仏教福祉史入門』,法蔵館,2001
- 吉田久一『社会福祉と日本の宗教思想』,勁草書房,2003
- 『労働共済』解説・総目次・索引,不二出版,2005
- 若尾祐司,井上茂子編『近代ドイツの歴史—18世紀から現代まで』,ミネルヴァ書房,2005
- 『渡辺海旭遺文集 壺月全集』上下巻,壺月全集刊行会,1933(1977年改定発行。本稿で『壺月全集』というときはすべてこれによる)